ない部分が確かにあります。でもぼくは陰謀はないと思う。陰謀というのは隠されたたくらみだから、バレたらなくなるものです。でもコロナとそれに関わることはなくならないので、これは陰謀ではない。

多くの人が生きていくために、自分の仕事をきちんとするために、こうしなさいと言われた方向に集団的に動くと、全体としてそれが陰謀に近いような現象になってしまうだけであって、世界征服を企む悪の組織が、なんてことはないでしょう。ましてやワクチンの中にマイクロチップが混入されている、なんていうことはあり得ない。

それでも一方、たばこに関連して、ああそういうことだったのか、と強く感じたことがありました。ぼくはそれまで正直なところ、どうしてWHOがたばこだけをあれだけ叩くのか不思議でなりませんでした。たばこはもちろん健康上のリスクではあるでしょう。ただそのリスクは他の嗜好品や食品にも、さらにはさまざまな生活習慣の中にもある。冷静に考えれば、たばこがその中で特に際立って危険だということではありません。そうでなければたばこ・喫煙が500年以上も社会に許容されてきたはずがありませんから。

にもかかわらず、かなり偏った疫学的な数値的指標がマスメディアを通じてセンセーショナルに拡散され、あたかも「たばこさえなくなれば人類はもっと健康になれる」かのようなキャンペーンがWHOの旗振りによって展開された。これを、グローバリズムの進行とともにコロナのような状況を想定し、対応を準備する過程だったとみるのは、うがち過ぎでしょうか。いや、その意図はなかったにしろ、現象として、たばこの排斥運動は間違いなくコロナの状況を先取りしています。

嗜好品というものは、もちろん人によって合う合わないがあり、それが苦手な人もいます。たばこが苦手が人が隣にいるのに、いくらでも喫って構わないとは昔も今も誰も思っていませんよね。それは個々の場合で配慮する、現場で人々が知恵を絞って判断すればいいことであって、それをWHOみたいなところが大々的にキャンペーンを張って追い詰めていくというのは、どう考えても不自然で、これは明らかに政治的な問題です。

二元論に絡め取られるな 無菌・潔癖社会の落とし穴

数値的・客観的な意味におけるリスクを最小化し、より大きな「安心・安全」を追求する観念的な二元論のもと、私たちはそれまで当たり前のように行ってきたリスクを引き受けてさまざまに活動し、それらの間にバランスを取るという「生きること」「生きる意味」を失いつつあります。やがてそれは私たちを「生きながら死んでいる」ような状態に、つまり「動く死体（ゾンビ）」化させ、人類文明そのものを衰退させることになる。考えてみればコロナ下、各人が「巣ごもり」で閉塞あるいは充足していた状況とは、「社会のゾンビ化」と言えるかもしれません。

社会が陥っているその衰弱から抜け出すために、ぼくがここしばらくキーワードとしていたのが「ファルマコン」（毒と薬とを同時に意味し、毒的なものと薬的なものが対立しているのではなく、むしろ連続しているという前提に立つ）という概念です。「ファルマコン」はプラトンの哲学にも登場し、英語のファーマシー（薬局）の語源にもなった、とても興味深い考え方です。ようするに固定した二元対立の代わりにバランス感覚が大切であるということ。害を含むものも、役に立つ場合があるという認識です。

ぼくはこうした考え方を、亡くなった「カイチュウ博士」藤田紘一郎さんから多く学びました。彼は過度のキレイ社会の持つ危険性に警鐘を鳴らし、適度な「不潔さ」がむしろ免疫を強める場合もあることを指摘しました。たとえば赤ちゃんの時期とは、世の中にどんな病原体が存在するかを全身で知り、強靭な免疫系を形成・獲得しなければならない時期です。触るものすべてが除菌されてしまっては、その情報を得ることができず、赤ちゃんはその後、大きな脅威に晒されることになってしまいます。一時話題になった大腸菌O157について、彼が慨嘆していたことをよく憶えています。「こんなヤワな大腸菌、半世紀前だったら誰も食中毒なんかにならないよ」。

人間はもう少し「いいかげん」であった方が、健康で幸福でいられる。いいかげんとは「良い加減」、全体を見て好い塩梅ということで、これがファルマコン的なバランス感覚だと思います。あえて言うなら毒も少しは摂った方が、結局のところ身体にも心にもいい。たばこについても、ぼくはそのように考えています。

PROFILE 吉岡 洋（よしおか・ひろし）

1956年京都府生まれ。京都大学文学部哲学科卒業。同大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。甲南大学教授、情報科学芸術大学院大学教授、京都大学大学院文学研究科教授などを経て、現在、京都芸術大学文明哲学研究所教授。専門は美学・現代思想。『京都ビエンナーレ2003』『岐阜おおがきビエンナーレ2006』総合ディレクター。美学会前会長。日本学術会議会員。著書に『〈思想〉の現在形――複雑系・電脳空間・アフォーダンス』『情報の宇宙と変容する表現』（共著）など多数。

Tobacco Diverse Opinions

街には開かれた喫煙所が必要だ

多様性と他者への配慮を育む場として

2020年の改正健康増進法施行以来、コロナ禍もあって、オフィスや街中から喫煙コーナー、喫煙所が撤去・閉鎖されるケースが目立ちました。私は普通一般の飲食店はじめ屋内に関しては、事業者の方針が尊重されたうえでの禁煙は是とすべき、一方で屋外には適当な喫煙所が必要だと考えています。本来であれば激変緩和、時間をかけて段階的に喫煙空間を縮減すべきところを、屋外も屋内も一律に禁煙ではそれはいろいろ不都合なことも起こります。飲食店の前やビルの入口・裏口での喫煙、ポイ捨て。残された数少ない喫煙所に喫煙者が殺到して煙がもうもうと立ち込め、流れ出たそれによる「望まない受動喫煙」の頻発、クレームによる撤去――場を変えてのさらなるその繰り返しと、現状は負のスパイラルに陥ってしまっていて、喫煙者も非喫煙者も不満がたまる一方です。これでは何のための改正健康増進法かわかりません。

いったん決まったルールですが、やはりこれは現状に鑑みて、柔軟に考えることが望まれます。「望まない受動喫煙の防止」が本旨ですから、「受動喫煙」という言葉が空疎に思えるような環境での規制は疑問ですし、インバウンドが再び増えているいま、不要な摩擦を避けるためにも、ある程度は海外（原則屋内禁煙・屋外喫煙可）との整合性を保って、大きなギャップはつくらないほうがいいでしょう。喫煙者と非喫煙者が対立・分断でなく共存する、多様性に富んだまちづくりという観点からも、屋外に喫煙できる場所、喫煙所は一定数必要です。

なぜ日本の公園には禁止事項が多いのか

インバウンドに関連して言うと、たとえばヨーロッパでは、ある場所でどういう行為をどの程度までしていいかということについて、各人が自らを律して主体的に行動しているように思います。ここは騒いでいい場所なのか、寝転んでいい場所なのかそうでないのか。ルール自体も緩くて、行動はその場の各人の「自律」による判断に任されている。

コロナのときもそうでした。厳しく規制したのも緩めたのも、ヨーロッパで

隠す、閉じるのでなく、開かれること。リラックスした喫煙シーンがそこに見えてこそたばこへの理解が深まり、それは多様性に富んだ街の景観の一部ともなる――。喫煙所のあり方についてそう提言する東京都市大学・小林茂雄教授（建築都市デザイン学部）は、だからこそ喫煙者は自分の行動が周囲にどう映り、どう影響を及ぼすのかということに、もっと想像力を働かせてほしいと注文する。「マナーの順守、向上はもちろんです。それだけでなく、たとえば喫煙可の場所であってもいまは喫うべきでないという状況が多々ありますよね。その際の配慮を、愛煙家の皆さんにはぜひなさっていただきたい。ここならどう喫ったって構わないだろ、という喫煙者が多すぎないでしょうか」。小林教授の話に、以前訪ねた専門店の喫煙所と、女性店主の笑顔が重なった。ガラス張りで表通りから中が見えるその喫煙所では、愛煙家が姿勢を正し、陽が落ちればそこは、計算された照明の加減で一幅の絵のようだった。「でしょ？ あそこで喫えば誰もが俳優さん（笑）。俳優さんなら格好つけなきゃ」「だから私、行儀が悪い方のことは強く叱りますよ」。いま、求められる喫煙所、愛煙家の姿とは。

小林 茂雄
工学博士・東京都市大学教授

多数ではないその姿ですが、それゆえ無神経さが際立ってしまう。そうした態度はたばこを喫わない人からすれば受け容れがたいものだし、たばこへの嫌悪感を強めるばかりでしょう。

国民性の違いと言ってしまえばそれまでですが、明治以降の富国強兵＝軍隊育成を柱とした教育、集団の和を乱さず、言われたことを忠実にこなせばよしとする教育も、自分を律することのできない国民性を育てたのかもしれません。自律できず、公共意識が育たないまま、議論することなくお上のお達しには従う。その結果、喫煙、スケボー、ボール遊び等々、いま、パブリックな場所、公園や広場で日本ほど禁止事項が多い国は、他にありません。しかし「迷惑だから」「危ないから」とこれもダメ、あれもダメと禁止するだけでは、根本的な解決にならず、それは窮屈で息苦しい社会を到来させるだけです。

その姿や活動が見えてこそ理解・寛容度が深まる

コロナ下で在宅勤務が増え、住居においても独立した個室のような環境が求められましたが、ただそれ以前からの住宅のつくりは、オープンで、個室をつくるというより広いリビングを軽く仕切って使うような造作が主流になっています。私も、個室で誰にも見られないからと放縦に過ごすよりは、オープンな場でお互いを意識しながら一緒に過ごすほうが、それは気遣いにもつながってより豊かなコミュニケーションが生まれるのでは、と考えます。

若い人の間では、シェアハウスに住み、車や服もシェアして使うなど、「シェアすること」に価値を見出す流れがあるようです。オフィスでもオープンなスペース、フリーアドレスで仕事を行い、違った部署の人が混じり合い、刺激し合いながら、お互いを高めていこうとするスタイルが増えていますね。

人は人に影響を与え、また与えられるものなので、シェアハウスやフリーアドレスのオフィスに限らず、性別や年代、国籍もさまざまな人たちが同じ空間にあって交流することで、他者への理解、寛容の度合いも深まっていく。街はその最たるものです。さまざまな人の存在、活動が目に見えることで、自分とは異なる者への関心が生まれ、理解が進む。それは多様性となって蓄積され、街を陰影に富んだ、魅力的な場所にする。ある事物や行為を禁止して、それに向けられる視線も遮ってしまうだけでは、街や地域は貧しく、やせ細ったものになってしまいます。

これらを考え合わせ、私は現在たばこをやめていますが、喫煙者と非喫煙者の共存、望まない受動喫煙の防止、ポイ捨て防止という観点からだけでなく、多様性に富んだ豊かな街づくりという意味からも、街には喫煙の風景、喫煙所があってしかるべきだと考えています。それは隠されるべきではもちろんなく、開かれた、街を構成する一シーンとして存在してほしい。ですから喫煙所で、愛煙家の皆さんは気持ちよくたばこを喫って、その気持ち良さげな姿を存分にアピールしてください。ただし気持ちよくとは、たばこを喫わない人にとっても、です。「気持ちよく喫う」には、時に周囲に配慮した「喫わない」という選択も含まれることを、ぜひ心にお留め置きください。喫煙者も非喫煙者もとも

は早かった。市民も、自らの判断で自粛して家にこもるのはやめよう、感染の恐れはあるかもしれないが、それでも自分の人生をどう生きるかは自分で決める、と戸外に出ました。その想いは一方で他者への配慮にもつながるわけですが、アジア、とくに日本では個人で考えることなく、まず規制というかルールが決まって、それに従うか否かで価値判断が問われる。ルールでよしとされれば何をやっても構わないし、ダメだと言われたらおとなしく従う。たばこを例にすれば、喫煙可の場所なら文句を言われる筋合いはない、とばかりに咳込んでいる人が近くにいようが妊婦さんが顔をしかめようが、所かまわず喫ってしまう喫煙者を見かけないでしょうか。決して大に気持ちよく、リラックスできてこそ街の喫煙所は成立するのですから。

過密回避へ――時間帯や曜日で使える喫煙所があっていい

ヨーロッパのオープンカフェなどではたばこが喫えて、渋いおじさんがゆっくりとパイプを愉しんでいたりします。その姿はこの上なく周囲に調和して、まさに街の景観の一部です。中近東なら街角の路上に水パイプを喫わせる店があり、こちらもリラックスした時間が流れています（いまはちょっと大変ですが）。

日本でオープンカフェや路上での素敵な光景が難しいなら、喫煙所でそれを実現できないでしょうか。いま、国内の喫煙所は、（当たり前のことですが）区画された中でいかに快適にたばこを喫うかという点に重きが置かれています。ただそのつくりには、たばこを喫わない人から喫煙所がどう見えるか、中でたばこを喫っている人がどう映るかという視点が欠けているように思います。そして、中の喫煙者の姿がなにかすごく侘しい、寂しいものに見える。それが景観として現れたとき、あまりプラスには働かないようなその見え方は、少し残念です。

窮屈な場所に大勢の人が集まってしまうわけだから、見せ方の演出といっても確かに難しい。本来なら、たばこを楽しく喫ってリラックスしている様子が外部に見えてこそ、地域に必要なものだと認識されるはずなのですが……。

●屋外

では、見せ方の前にまず過密を防ぐ方策を考えてみましょう。もちろん数を増やせばいいわけですが、実際問題としてそれが難しいということであれば、たとえば人流データに基づいた、時間帯や曜日によってフレキシブルに使えたり使えなかったりする喫煙所はいかがでしょう。海水浴場やスキー場でも、遊泳の可否やゲレンデで滑れる滑れないには条件がありますから、それと同じに考えればいい。

さらに細かく、風向き（煙の行方）によって使えたり使えなかったりする喫煙所があってもいいでしょう。AIを活用すれば、それはいま容易に実現できるはずです。ある喫煙所が過密になったら、近くの別の喫煙所が案内されるようなシステムも備えて。その人数制限がなされた上でなら、いかに楽しげかと演出を凝らすこともそう難しくないように思います。

喫煙所の設置にあたってはたばこ税を原資とすることが妥当ですが、その際には、喫煙所とは喫煙者・非喫煙者の共存に向けた施設であり、多様性を尊ぶ社会のシンボルでもある旨のアピールがなされればいいですね。ただ繰り返しになりますが、愛煙家の皆さんには自らの姿勢を省みてほしい。そして、喫煙所で気持ちよくたばこを喫う自分たちの姿が、周囲を気持ちよくもその反対の気分にもさせるのだということを、忘れないでいただきたいと思います。

●屋内

これまで主に屋外の喫煙所について話してきましたが、一方、屋内のものについてはどうでしょうか。私の専門分野の一つに「光環境」があるので、それに絞って話をすると、空間の照明では色温度という波長のバランスが重要で、一般的に長波長で暖色系の照明のもとではリラックス、短波長で白色系のもとでは集中できるといわれています。

これを喫煙所に応用すれば、そこに求められるのはリラックスでしょうから、暖色系の照明が採用されるべき。間接照明を取り入れたりするのも効果的です。そういう光が漏れているような場所は、中に人がいることがわかると光色と人の存在が相まって、中が親しみやすい、楽しげなものとして外部に伝わります。ただしあまりリラックスしてしまうのも困りものということでしょうか、オフィスの喫煙所で多く見かけるのは白色系の照明です。こちらは白い光が外に漏れていても、あまり楽しそうには思えない。よそよそしい感じがするんですね。

ですから屋内においても、時間帯で暖色系、白色系と照明が替わるようにすれば、一服してリラックスしたり、素早く喫ってシャキッとしたりと、まさにたばこの「二相性」に即した、効果的な喫煙所ができるのではないでしょうか。

PROFILE 小林 茂雄（こばやし・しげお）

1968年兵庫県生まれ。東京工業大学工学部建築学科卒業。同大学院総合理工学研究科社会開発工学専攻修士課程修了。工学博士。武蔵工業大学准教授、ネヴァダ州立大学ラスヴェガス校客員研究員などを経て、現在、東京都市大学建築都市デザイン学部教授。研究テーマは、建築と都市の光環境計画から落書きやストリートアートにまで及ぶ。2010年日本建築学会賞（論文）受賞。著書に『写真で見つける光のアート』など。地域に根ざした嗜好品に関心を寄せ、訪れたイエメンでは「カート」も嗜んだ。